

# ジュール・ヴェルヌ『ハテラス船長の航海と冒険』

—〈驚異の旅〉新訳コレクション第Ⅰ巻刊行に寄せて—

Jules Verne, *Voyages et aventures du capitaine Hatteras*

En marge de la publication de sa nouvelle traduction japonaise en tant que premier volume de la collection *Voyages extraordinaires*

荒原 邦博

ARAHARA Kunihiro

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

E-mail: arahara@tufs.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.46 2020, p.165-170.

原稿受理 2021-01-07 ; 最終版 2021-02-17

抄録

ジュール・ヴェルヌ『ハテラス船長の航海と冒険』の新たな日本語訳、ならびに〈驚異の旅〉連作をめぐる新コレクションの紹介

## Summary (Résumé)

Présentation de la nouvelle traduction des *Voyages et aventures du capitaine Hatteras* de Jules Verne, et de la nouvelle collection en japonais de la série des *Voyages extraordinaires*.

キーワード:ジュール・ヴェルヌ、『ハテラス船長の航海と冒険』、『蒸気で動く家』、〈驚異の旅〉連作

© ふらんぼー Flambeau 46 (2020) pp.165–170.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



## マルセル・ブルーストからジュール・ヴェルヌの新訳コレクションへ

本稿の著者のことをご存知ない方も多いかと思うので、まずは簡単な自己紹介から始めさせていただきます。2018年4月に東京外国語大学言語文化学部のフランス文学・文化担当教員として着任しました荒原邦博と申します。もう25年近く、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』を中心に(拙著『ブルースト、美術批評と横断線』、左右社、2013年、をご高覧頂ければ幸いです)フランス文学と美術(館)をめぐる文化史の研究を行ってきました。ブルースト研究者の教員という点では、フランス語専攻では岩崎力先生以来ということになるかと思います。もちろん、筑摩書房版ブルースト全集に結実している先生のお仕事や、マルグリット・ユルスナールやフィリップ・ソレルスといった、数々のフランス小説の画期的なご翻訳と比べますと、岩崎先生以来と申し上げること自体がかなり躊躇われるのも事実です。先生とはご生前に、私は一度だけお話させて頂いたことがあるのですが、まさに着任しました2018年の11月に偶々、岩崎先生の書庫にお邪魔する機会を得ましたので、その訪問の様子などもいずれお伝えさせて頂ければと思っておりますが、今回はひとまず自己紹介に止めることと致します。

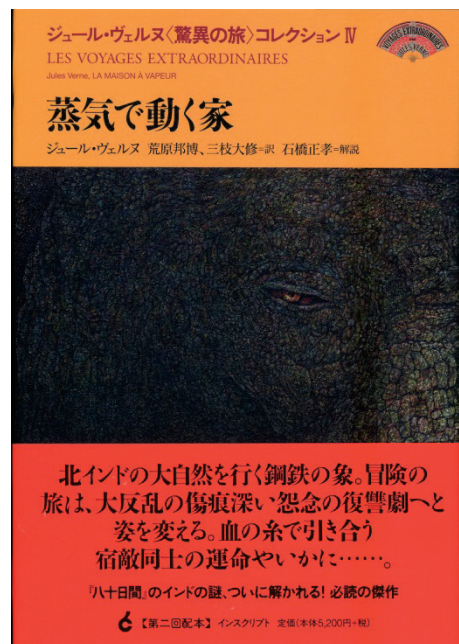
ブルースト研究者である私は、十数年前にひょんなことからジュール・ヴェルヌの翻訳に携わるようになったのですが、この度、インスクリプトより刊行中の〈驚異の旅〉新訳コレクション全5巻の第1巻にあたる『ハテラス船長の航海と冒険』が漸く上梓の運びとなりましたので、ここにご報告させて頂くことになりました。そう言えば、岩崎先生もヴァレリー・ラルボーの『幼なごころ』を翻訳されており、この短編集はある種の児童文学と呼べないこともありませんので、その意味ではブルーストから始めてヴェルヌという青少年向けのSF冒険小説を数多く産み出した作家の翻訳へと向かうのは、それほど意外なことではないのかも知れません。

とはいえ、そこにはやはり大きな違いもあります。なぜなら、ヴェルヌは大衆文学作家であり、いわゆる純文学作家ではないからです。しかし、ヴェルヌが「青少年向けのSF冒険小説作家」であるというのは、実はこの作家をめぐる長年に渡って日本で作り上げられてきた紋切型のイメージに過ぎません。ヴェルヌの『八十日間世界一周』が川島忠之助によって明治期にフランス語から日本語に初めて翻訳された小説であることはすでに非常に有名ですが、それ以来、およそ150年に渡ってヴェルヌをめぐる「児童向け」というレッテルが、日本ではまことしやかに流通してきました。しかしながら、フランスの作家に限るとしても、レーモン・ルーセルからジャン・コクトーやジュリアン・グラック、そしてミシェル・ビュトールからジョルジュ・ペレック、さらにはノーベル文学賞作家J・M・G・ル・クレジオに至るまで、ヴェルヌからの影響を語る作家は数多く、ヴェルヌが単なる「児童向け」の作品を書いていたのではないことは明らかなのです。

19世紀のフランス文学には、オノレ・ド・バルザックの〈人間喜劇〉とエミール・ゾラの〈ルーゴン＝マッカール叢書〉という2つの巨大な小説作品連作があることはよく知られていますが、実はその陰に隠れてこれまで日本ではその存在がまともに取り上げられずにいた幻の連作があって、それこそがジュール・ヴェルヌの〈驚異の旅〉シリーズなのです。もちろん、この〈驚異の旅〉*Voyages extraordinaires*には、長年に渡って読み継がれている大人気作

品、『気球に乗って五週間』、『地底旅行(地球の中心への旅)』、『月世界旅行(地球から月へ、および、月を回って)』、『海底二万里』、『八十日間世界一周』などが全て含まれています。しかし、〈驚異の旅〉シリーズは実際には 60 作品を超える小説群から構成されており、日本語に翻訳されて常に手に入れることが可能なせいぜい 20 編程度の作品に加えて、私たちがヴェルヌの世界として通常イメージするものからはおよそ懸け離れた、多様で不思議な、それ以外の作品もそこには数多く含まれています。それに、〈驚異の旅〉シリーズは 19 世紀フランスを代表する敏腕編集者ピエール＝ジュール・エッツェルがヴェルヌと二人三脚で創造したものなのですが、このエッツェルとは他でもなく、バルザックの〈人間喜劇〉の編集者でもあったのです。

したがって、ヴェルヌに対する 150 年に渡る眠りから日本人読者を揺り起こし、ヴェルヌという稀有な作家と〈驚異の旅〉の総体を日本語で初めて紹介する試みとして、インスクリプトのジュール・ヴェルヌ〈驚異の旅〉新訳コレクション全5巻はヴェルヌ研究における第一人者である石橋正孝氏を中心に企画され、この度、その第4回配本として、第 I 巻である『ハテラス船長の航海と冒険』の刊行に至ったのです。本コレクションでは、すでに第 II 巻『地球から月へ 月を回って 上も下もなく』(石橋正孝訳)と第 V 巻『カルパチアの城 ヴィルヘルム・シュトーリッツの秘密』(新島進訳)が刊行されていますが、拙訳(三枝大修氏との共訳)としても第 IV 巻『蒸気で動く家』が 2017 年に上梓されています。『蒸気で動く家』は〈驚異の旅〉シリーズ中、21 番目の作品に当たりますが、明治期に森田思軒によって前半、第1部の翻訳が英語からの重訳として行われて以来、日本語での第1部・第2部全体の完訳は初めてという画期的なものでした。それにこの小説は、ディズニーランド嫌いのフランス人が好んで訪れることで有名な、今となってはフランスを代表するテーマパークの一つ、ナントのヴェルヌ・テーマパーク、レ・マシシ・ド・リルとも深く関係しています。そこでの最大のアトラクションは機械仕掛けの象の乗り物なのですが、そのモデルとなったのが「スチーム・ハウス」こと「蒸気で動く家」であるため、『蒸気で動く家』はまさに現代に生きる日本の読者に日本語として送り届けられることが待たれていた作品だったのです。『八十日間世界一周』のインドのエピソード、主人公フィリアス・フォッグの一行がパスパルトゥの働きによってサティエの犠牲にならんとしていたアウダを救う場面が、子供時代の読書の記憶として脳裏に刻まれている方も多いのではないかと思います。『蒸気で動く家』では、フォッグ一行が西から東へと辿った道筋をちょうど東から西へと辿る、反対向きのインド旅行が展開するのですが、ヴェルヌ唯一のインドものとしてアウダがなぜアウダであったのか、その名前の由来と意味合いが突如として明らかにされる、そうしたお楽しみも隠されている作品ですので、是非お手にとって頂ければ幸いです。





## 『ハテラス船長の航海と冒険』あるいは〈驚異の旅〉の「はじまり」



さて、いよいよ今回、2021 年春に刊行される『ハテラス船長の航海と冒険』に話を進めましょう。この小説のタイトルをすでに知っておられるという方は、相当なヴェルヌ通です。けれども、おそらく大半の方は『蒸気で動く家』と同じように、『ハテラス船長の航海と冒険』(以下、『ハテラス』)のこともご存知ないでしょう。〈驚異の旅〉シリーズとしては、単行本の刊行年を基準にすれば、第4作になります。ヴェルヌのいわゆる初期7作品には、『気球に乗って五週間』、『地球の中心への旅』、『地球から月へ』、『月を回って』、『海底二万里』などの超有名作品ばかりが並んでいるのですが、その中にあって『ハテラス』は、知名度と言う点ではいささか不遇をかこっていると言わざるを得ません。けれども、この小説は最初、明治期にロシア語からの重訳として刊行されたのですが、外大の卒業生のみなさまにとっては驚くべきことに、外大

(当時の名称は東京外国語学校)ロシア語学科出身の福田直彦なる人物によってその翻訳は行われたのでした。フランス語からの最初の翻訳は 1963 年にもたらされましたが、抄訳に止まり、小説本文の全訳が行われたのは漸く 1979 年になってからのことでした。そうは言っても、このパシフィカ版には挿絵が一切掲載されておらず、挿絵を含む作品の全体が明らかになるのは、それからさらに 40 年を経た、今回の拙訳が初めてのことになります。それに何よりも『ハテラス』が重要なのは、挿絵版〈驚異の旅〉シリーズがエッツェル社から 1866 年に刊行が開始されることになった時に第1回の配本に選ばれ、それゆえにこの作品の冒頭に〈驚異の旅〉シリーズ全体の「序文」が置かれたことにあります。つまり、この小説が〈驚異の旅〉の始発点とされたのであり、この「序文」とともに小説本文を読むのでなければ『ハテラス』という作品の意味を理解することができないばかりか、〈驚異の旅〉シリーズとは何か、ということを知ることもできないのです。その「序文」と挿絵を伴った形で、『ハテラス』の全体を初めて日本の読者のみなさまにお届けできることになったというのは翻訳者としてまことに喜ばしく、明治期に外大ロシア語学科が開いた翻訳の環をフランス語学科として繋ぐことができたというのも、何やら意味があることのような気がしております。

それでは、「ハテラス船長」とは誰なのか、そしてこの小説とはどのようなテーマをめぐるものなのかということになりますが、それについてはもちろん、詳しくは本訳書をご覧頂ければと存じます。ですが一応、ネタバレにならない範囲でのご紹介はさせて頂くことに致します。とある帆船兼蒸気船がイギリスのリヴァプールで建造され、その船には優秀な乗組員達が集められるのですが、船は行き先不明のまま出発し、ひたすら北を目指して進みます。ヴェルヌは最初の長篇『気球に乗って五週間』と同じく、『ハテラス』でもイギリス人を主要な登場人物としています。そう、『ハテラス』とは実を言えば、ヴェルヌが『気球に乗って五週間』

の成功を受けて執筆した長篇第2作であり、第3作である『地球の中心への旅』の直前に書かれていたのです。『ハテラス』のあらすじに話を戻しますと、この船は 1860 年に出航するとされていますが、これには理由があって、それはこの物語が当時ヨーロッパで広く耳目を集めた北極圏探検の悲劇の英雄、ジョン・フランクリン提督の探検隊と関係しているからです。

フランクリン卿は北西航路を求めて北極圏に旅立ったのですが、探検隊の一行は途中で消息を絶ったまま十数年間行方不明となり、イギリスは何度もその探索を行う部隊を派遣しました。そして遂に 1859 年、フランクリン隊の全滅がマクリントク調査隊によって明らかになるのですが、これによってその探検の成果が極めて曖昧であったフランクリンが、悲劇の英雄として北西航路の発見者に仕立て上げられていくことになります。ヴェルヌが『ハテラス』を執筆した当時、西洋社会に一大センセーションを巻き起こしていたフランクリンというヒーローとその行状が、この小説の背景となっているのです。

帆船兼蒸気船である「フォワード号」がこのフランクリン提督の冒険とどう関係するのかは読んで頂いてのお楽しみです。小説の冒頭から、どうやら「フォワード号」の船長は犬らしい、という噂がリヴァプールの街に広まっています。犬が船長の船だって？ 犬船長なんて本当にいるのか？ という疑問ばかりの中で物語は始まり、その船には副船長シャンドン、博物学者ドクター・クロボニー以下 18 名が乗り込むのですが、いささかゴシック小説めいた怪奇現象が北極圏の気象条件によってもたらされる幻視や錯覚、蜃気楼などを通して、次から次へと読者の目の前で展開します。まさに 19 世紀後半の娯楽の中心にあったパノラマ館かジオラマ館にいるかのような体験に、いつの間にか時の経つのを忘れてしまうでしょう。はてさて、犬船長とは何なのか、そしてやがて人間の船長は姿を見せるのか、船長が現れた場合に自分こそが船長であると信じていた副船長シャンドンはどうなるのか、そして、第1部の最後で雪と氷の下に埋もれて生死の境を彷徨っている男は一体誰なのか、さらには、「フォワード号」の乗組員たちの目的地とは結局のところどこなのか。こうした数々の疑問に対する答えは、『ハテラス』を読んで頂いてのお楽しみということになりますが、この作品では第1部に「北極のイギリス人」、第2部に「氷の砂漠」というタイトルがそれぞれ付けられており、また第2部は最初のうちはヴェルヌによって「氷のロビンソン」と呼ばれていたということだけ、お伝えしておきましょう。『ハテラス』は言うなれば、氷の世界に舞台を移した『ロビンソン・クルーソー』なのです。

このまま行くと、どうやら物語の内容を全部お話ししてしまいそうですので、この辺りで打ち止めということに致しまして、みなさまには是非、本書『ハテラス船長の航海と冒険』をお読み頂ければ幸いです。ところで、プルースト研究をしていた私がヴェルヌの面白さに気づいたのは、日本ジュール・ヴェルヌ研究会という非常に楽しい集まりに参加したことがきっかけでした。この会は毎年一度、読書会を開催し、それを再録した頁を含む独自の会誌も発行しており(さらにその会誌を読んだ意見交換の場である合評会も年に一度あるのですが)、先ほどご紹介しました石橋氏や新島氏を中心に世界のヴェルヌ研究における最先端の知見に触れることができるとともに、決して狭い学術的研究に偏ることなく一般読者のみなさまのヴェルヌ愛好にも応える懐の広さがあり、中学生から退職されたご高齢の方々まで、非常に幅広い顔ぶれの会員を誇っています。ちなみに 2020 年度の読書会では『ハテ

ラス』を取り上げて頂き、拙訳に対する貴重なご意見の数々を賜りました。ということで、日頃、知的な関心を持て余し気味の方がいらっしゃいましたら、是非この日本ジュール・ヴェルヌ研究会にもお気軽にご参加を頂ければ幸いです。きっとみなさまの人生も、いっそう豊かに変わるはずです。それではみなさま、ここまで拙文をお読み頂きまして誠にありがとうございました。どうぞ本年も、みなさまにとって素晴らしい〈驚異の旅〉がありますように！

ジュール・ヴェルヌ 『蒸気で動く家』、荒原邦博・三枝大修訳、インスクリプト、2017

ジュール・ヴェルヌ 『ハテラス船長の航海と冒険』、荒原邦博訳、インスクリプト、2021

『Excelsior!』第15号、特集『ハテラス船長の航海と冒険』、日本ジュール・ヴェルヌ研究会、2020年11月22日発行

日本ジュール・ヴェルヌ研究会 <http://julesverne.jpn.org/>